

野口英世と中南米 (1)

「サウスバンド」でパナマ運河を通行した 最初の日本人・野口英世

山 本 厚 子

私が長年の夢だった、「パナマ運河通行」を実現させたのは、1988年11月のことだった。

その頃パナマ共和国では、国内の混乱が1年以上も続き、米国が運河通行料不払いを含む、対パナマ経済封鎖を強行してからすでに8か月が経過していた。ノリエガ將軍の言動が国際的に注目される頃だった。

「この時期に運河を通行するのは難しいわよ。あなたも物好きね・・・」と、パナマ人の友人に笑われた。

しかし、日本海事協会パナマ支部の衣笠啓司氏のご尽力により、ノルウェー船籍で8万トンのコンテナ船、トルコイン号に乗船出来ることになった。

パナマの朝は、太平洋側のバルボア港の沖に停泊して運河通行の順番を待つ大小の船舶のエンジンの音で始まる。

一番に運河を通行する船は、4時すぎには沖を出発して半月型で白色のアメリカ橋の下を通り抜け、第一閘門のあるミラフローレスへと向かう。あたりはまだ薄暗く、運河の両側に並んだ照明灯が水面を青く照らしているだけである。

その日の朝、トルコイン号は8時に通行開始を許可されていた。6人乗りのランチに乗った私は、アメリカ橋を越えたところで待った。そして、巨船のタラップに飛び移り、12時間あまりの船旅が開始された。

全長80キロのパナマ運河は南北に伸び、大西洋に向かう方向が「ノースバンド（北進帯）」、その反対が「サウスバンド（南進帯）」と呼ばれる。

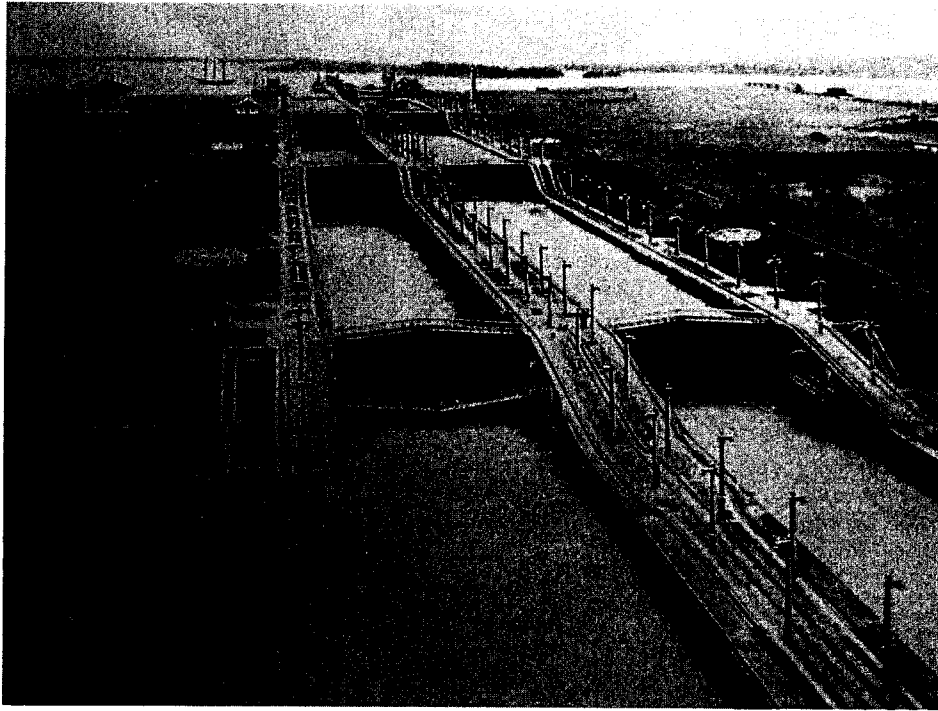
私の乗船したコンテナ船は、太平洋側のミラフローレス閘門で二段、ペドロ・ミゲル閘門で一段、約26メートル浮上し、そのままの水位で大西洋へと進んだ。

世界最大の人工湖・ガトゥン湖で大西洋側から南下してくる船舶の通過を待った。

ガトゥン閘門の左手にはチャグレス川を堰き止めたガトゥンダムが見える。

ガトゥン閘門は三段あり、一段約8.5メートルを三段一気に下ると、リモン湾に出る。すでに空には星が現れ、大西洋に出た時にはクリストバル港の街灯が点々と輝いていた。

パナマ運河の3ヶ所の閘門を通過する世界各国の船舶を数えきれないほど眺めたことがある。その様子は「船が山に登る」ように勇壮に見えた。しかし、実際に巨船の甲板に立



運河開通時のガトゥン閘門

ってみると、閘門で浮上している感覚はまったくなかった。

緑におおわれた運河の周囲の景色は、陸から見るよりはるかに雄大で美しい。心が躍るような、楽しく長い一日であった。

10年の歳月と3億8,700万ドルの工事費をかけて、米国の手によってパナマ運河が開通するのは1914年8月だった。しかし、運河の正常な運営のためには、中南米諸国で流行する黄熱病を撲滅する必要があり、米国政府の緊急課題であった。

そこで、ロックフェラー財団は黄熱病調査団をエクアドルの港町、グアヤキルに派遣することを決め、メンバー選出にあたり、ロックフェラー医学研究所で働く細菌学者の野口英世の名前が挙がったのである。

24歳の時、野口英世は片道切符でペンシルベニア大学のフレキシナー博士を頼って渡米した。その猛烈な研究態度で「野口英世は眠らない」と噂されながら、次ぎつぎと論文を発表する。梅毒のスピロヘータの発見などで、「世界のノグチ」と呼ばれるまでに出世する。ノーベル賞候補にも3度名を連ねた。

黄熱病研究のためにグアヤキルに派遣される調査団に参加要請があった時、野口は1週間考えてから「承諾」の返事をした。というのは、前年5月に腸チフスに罹ってから、再発、虫垂炎の手術と次ぎつぎと入院が重なり、体力を失い、健康に自信が持てなかったからである。

しかし、故郷の恩師・小林栄に、「今回、米国政府の陸軍部と衛生局の依頼により黄熱研究のために南米エクアドルに出張すること

になりました。熱帯地方に出張するのは誰でも危険で怖がることですが、それほどのことではないと思っています・・・」と、南米行きの決意を述べている。そして、妻メリー宛の遺言状を書き、遺髪を残してニューヨークを出発した。

1918年7月6日、野口英世は大西洋側のクリストバル港に到着した。彼は大西洋から太平洋への方向、「サウスバンド」でパナマ運河を通行した最初の日本人であった。

「午後、クリストバルに到着しました。検疫所のケーン博士がアンコンへの通行許可証を手配してくれました。古い友人であるマックファーランド博士が陸軍の士官として滞在しています。

楽しく夕食をとり、ホテルも快適で、論文の推敲^{すいこう}をしたりして過ごしています。ペルー船でグアヤキルに行くことになっていますが、その船はまだ到着していません。

この地の病院や研究所などを視察するつもりです。実験用のモルモットも無事に到着しました・・・」

上司のフレキシナー博士にこう報告している。(1918年7月6日付『野口英世書簡集 II』野口英世記念会)

野口英世は大西洋側のクリストバル港で上陸して、パナマ鉄道に乗って太平洋側のパナマ市に移動した。宿泊先は、アンコンの丘の赤い屋根に白壁の瀟洒^{しょうしや}なティボリ・ホテルであった。

手紙の中に書かれている病院は、やはりアンコンの丘にある「アンコン病院」である。研究所というのは旧市街に近いベージャ・ピスタ地区の住宅街、フスト・アロセメーナ通



野口英世が滞在した
ティボリ・ホテルのロビー

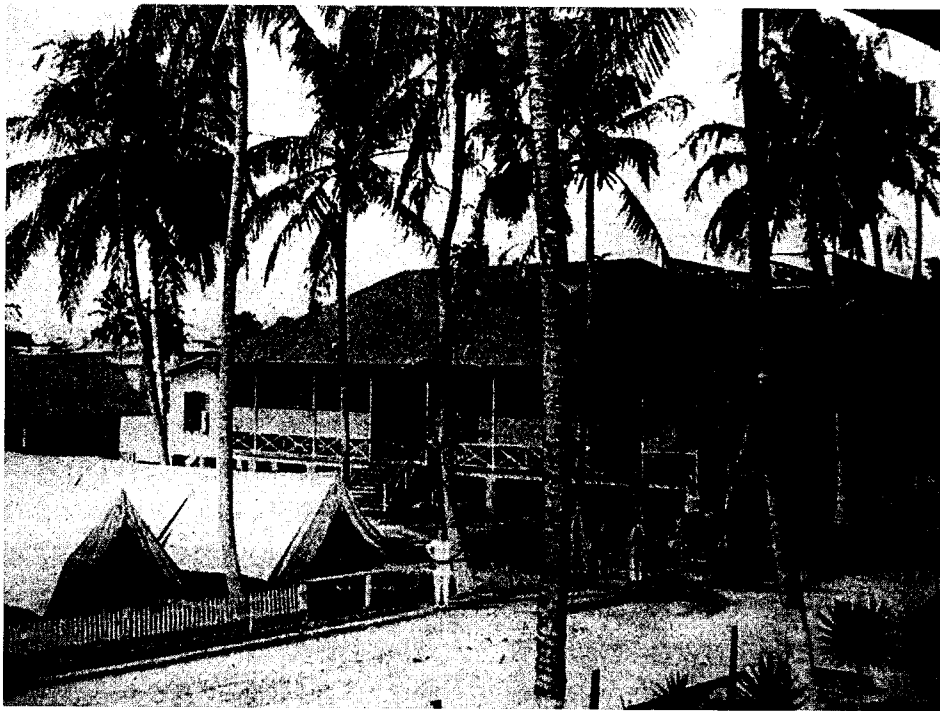
りに現在も所在する「ゴーガス研究所」である。

黄熱病の感染媒体が蚊であると言う事を発見したのはキューバのカルロス・フィンレー博士であった。彼の説を信じて、米西戦争時にキューバのハバナ市で大清掃運動を実施し、パナマ運河の建設現場で蚊の駆除と衛生問題の解決に貢献したのが軍医のウィリアム・クロフォード・ゴーガスである。

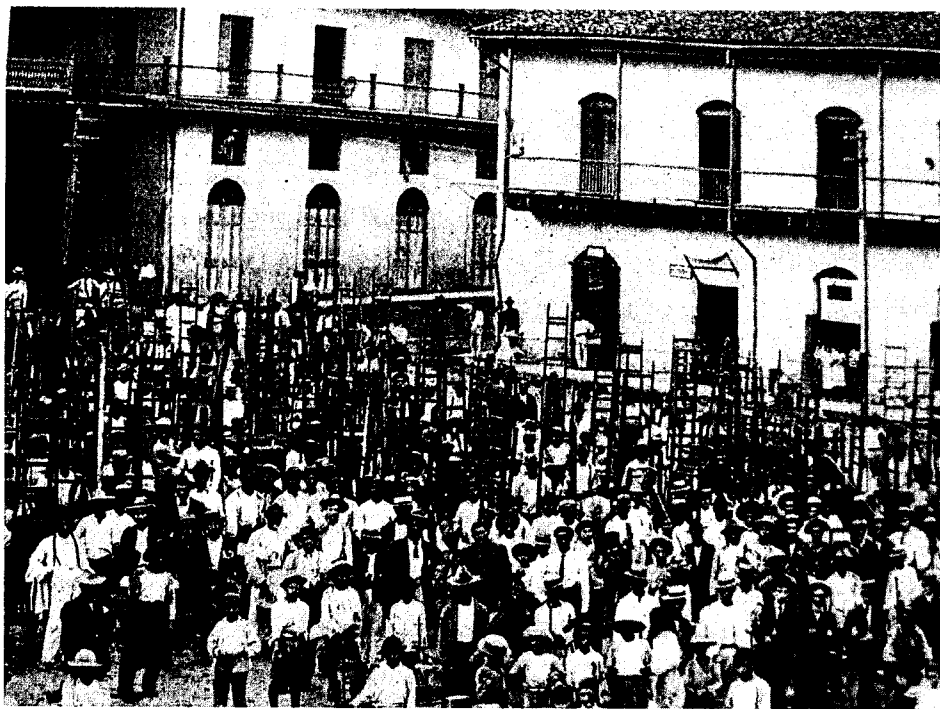
運河開通後、彼は米国議会から感謝状を授与され、軍医総監に昇格した。

パナマ市に数日滞在後、野口英世はペルー船籍のウカヤリ号に乗船した。向う先は赤道直下の港町グアヤキル。

(次号へつづく)



野口英世が実験を行ったアンコン病院



ゴーガス率いる衛生部隊

野口英世と中南米 (2)

アンデス山中の「ノグチ小学校」

山 本 厚 子

1918年7月15日正午、ペルー船籍のウカヤリ号はゆっくりとエクアドルのプナ湾（現グアヤキル湾）に入港した。甲板に立って、緑の濃いバナナ畑、遥か彼方に連なるアンデスの峰々を眺めたのは野口英世であった。

白いパナマ帽とスーツ、黒縁の眼鏡をかけ、足にゲートルを巻いた姿で出迎えた新聞記者たちを驚かせた。さらに、「ノグチが他の医学者と異なるのはスペイン語を話すことだ」と翌日のエル・テレグラホ紙は報じている。

この先約10年間に及ぶラテンアメリカ地域での黄熱病研究の第1歩を、野口英世は赤道直下の港町、グアヤキルに印したのである。宿はティボリ・ホテルであった。

グアヤキルは、16世紀にスペイン人に設立された町だが、「環境が悪い」と2度も見捨てられた。しかし、インカ帝国の征服者ピサロの命令で、フランシスコ・デ・オレジャナによって再び建設された港町である。黄熱病、マラリア、ペスト、赤痢など伝染病の温床として、近隣諸国の旅行者から恐れられていた。

野口英世は上陸した翌日から黄熱病検疫所（現国立公衆衛生研究所）のひと部屋で研究を開始した。そして、9日目に診断したインディヘナの娘の血液を培養した中から、黄熱病の病

原体を発見する。それは「レプトスピラ・イクテロイデス」と命名された。

ただちに血清が製造され、実験台に立った山岳地帯の陸軍の兵士たちの多くが、命を救われることになる。陸軍は彼に名誉大佐並びに名誉軍医総監の称号を授与した。

そして、帰国を前にした野口のためにオルメド劇場で盛大な謝恩送別会が催された。この時から野口英世はエクアドルの国民的英雄として崇められることになった。



「野口英世生誕百年」の記念に1976年に発行された切手



グアヤキルの国立公衆衛生研究所の正面に掲げられている「黄熱病原菌発見」のプレート

1918年10月27日の夕方、野口英世は英国船籍のマナビ号に乗船してニューヨークへ戻って行く。船が出港する時、見送りの人びとは「ビバ・ドクトル・ノグチ（野口博士万歳）！アスタ・プロント！（またお会いしましょう）」と、口々に叫び、帽子を大きく振って別れを惜しんだ。

それから64年後の1982年の秋、私は日本政府の水産無償供与援助計画の通訳としてグアヤキルに滞在していた。その時、カウンター・パートに案内されて「カジェ・ノグチ」通りを歩き、新港への産業道路の中央分離帯に立つ野口英世の胸像と対面した。首都、キトにも「カジェ・ノグチ」が存在した。

「何故、赤道直下のエクアドルに日本の細菌学者の野口英世の名前を冠した通りや胸像があるのだろうか？」

それが、ラテンアメリカ地域における野口英世の黄熱病研究について私が興味を抱くきっかけであった。そして、野口英世の足跡を辿る私の長い旅が始った。

「アンデス山中にノグチ小学校があり、行事のある時には日章旗を掲げるそうだ」という話には特に驚かされた。

その後、この学校の生徒たちと野口英世の出身校である猪苗代の翁島小学校の生徒たちが絵画を通じて交流をしていることを知った。

この小学校の設立には次のようなエピソードがあった。

1918年当時、厚生大臣であったイシドロ・アヨラは野口英世にキトで会い、黄熱病研究について説明を受けた。そして、厚生大臣は、陸軍の兵士の命を血清で救ってくれたことに謝辞を述べた。



グアヤキルにある「カジェ・ノグチ」通りの標識



グアヤキルの日本庭園に移された野口英世の胸像

イシドロ・アヨラは野口の死後、大統領に就任した。そして、日本人、野口英世の遺徳を偲んでアンデス山中にあった小学校に「エスクエラ・フィスカル・ヒデオ・ノグチ（野口英世公立小学校）」と冠したのである。

グアヤキルに滞在してから2年後、私は翁島小学校の生徒たちの作文を持ってアンデス山中の「ノグチ小学校」を訪ねた。

キト市からパンアメリカン・ハイウェイで北東へ約40キロ、海拔約2000メートルの位置にグァイヤバンバ村がある。この国際ハイウェイはアンデス山中を北はコロンビアとの国境のトゥルカン市まで伸びている。

盆地の村の住宅街にその小学校はあった。外観はまったく個人の家のようであるが、鉄格子の入り口に「エスクエラ・フィスカル・ヒデオ・ノグチ」と書かれた看板が架かっていた。年度末の冬休み中で子供たちの姿はなかった。



グァイヤバンバ村の「ノグチ小学校」の女子生徒たち

小さな校庭の両側に教室が合計8室並んでいた。教室の屋根はトタン葺きで、部屋の天井には裸電球が下がっていた。校庭の隅に遊び場がある。そして、校庭の中央に3本のポールが立っていた。学校行事の時に、この1本に日章旗が掲げられるという。

・・・昨年、2004年5月、私は再びこの学校を訪れた。

今回は、学校の入り口の廊下に、白いブラウスに格子縞のジャンパースカートの女子生徒が両側に並び、エクアドルと日本の国旗の小旗を振って私を出迎えてくれた。

校舎は拡張工事中であった。新たにコンピュータ室もあった。パトリシア・ベナルカサル校長は眼鏡をかけ、モスグリーンの制服姿で他の先生たちと笑顔で生徒の前に立っていた。

校庭の日章旗を掲げるポールの前に整列した

296名の全校生徒は「ブエノス・ディアス！ビエン・ベニーダ！（おはようございます。ようこそいらっしゃいました）」と大きな声で挨拶してくれた。ジャージーの胸にH.N.と野口英世のイニシャルの文字が見える。

校舎の壁に、野口英世の生涯を描いた絵画が20枚ちかく貼られていた。「博士の伝記を参考にして生徒たちが描きました。明日は博士のご命日ですから」と、校長は説明した。ちょうど翌日は野口英世の77回忌にあたる日であった。

「野口博士のように一生懸命勉強します」と、ひとりの生徒が言った。

黄熱病撲滅を目指して、猛烈な研究態度で精進した野口英世のことを、アンデス山中の「ノグチ小学校」の先生、生徒たちは今でも語り継いでいるのだった。

(次号へつづく)

野口英世と中南米 (3)

ユカタン半島で野口英世を信奉する一家

山 本 厚 子

メキシコのユカタン半島は、古代マヤ文明の遺跡、チチェンイツァ、ウシュマル、カバーなどを訪れる観光客で一年中賑わっている。マヤ遺跡の宝庫である。

観光の基点となるメリダ市は、半島の北西に位置し、旧市街には白いしっくい壁の家並みが続き、街角を歩く市民のまとう白い服装から「白い都」の愛称で親しまれている。

私は70年代から、この半島に点在するマヤ文明の遺跡に魅せられて観光旅行に出かけたひとりである。遺跡の近くの小さな村でハンモックに寝たこともある。グアテマラとの国境のジャングルの中のボナンパックの遺跡にまで足を伸ばした。

壮大なピラミッドの壁面のレリーフや神殿の壁画に描かれたマヤ人の前で、夢中でカメラのシャッターを押した。半島の北東部、イスラ・ムヘーレス島のエメラルド色の美しい海では海ガメや熱帯魚と泳いだ、すべてが昨日のように思い出される。

1919年の夏、メリダ市の人びとは黄熱病の恐怖に脅えていた。そして、州立医薬科大学の学長、フランシスコ・コロメはニューヨークのロックフェラー医学研究所宛に「是非と

も野口英世博士に黄熱病の調査研究をお願いしたい」という旨の要請書を送った。

前年にエクアドルのグアヤキルで黄熱病の病原菌を発見した「ロックフェラー医学研究所の野口英世」の名前は、ラテンアメリカ地域の隅々まで知れ渡っていた。

そして、その年の12月23日の夕方、野口英世はユカタン州立医薬科大学の要請に応じて、メリダ市にやって来た。

メリダの街は碁盤の目のように道路が通っている。南北の通りには偶数番号、東西に伸びる路には奇数番号が付けられている。

野口の滞在先は62番街と59番街の角、「ホテル・マドリッド（現在のレフォルマ）」の2階奥の広い部屋であった。

町の西部、イトゥエサス通りと旧市街に通じる59番街の角に大学がある。ホテルから徒歩で約10分の距離である。大学の校舎と道路を隔てた向かい側のオーラン附属病院の1室が野口の研究室となる。すぐに不眠不休の研究が開始された。

研究の合い間に、講演や実験が行なわれ、野口は実験動物の写生に彩色して学生に見せたりした。黄熱病に罹った患者から毎日血液を採取し、それは培養基と動物とに接種され



2 階の角部屋に野口が滞在したホテル・マドリッド（現レフォルマ）



名誉博士号の授与式が行われた州立ユカタン大学校舎を見つめる野口像

た。ついにメキシコでも黄熱病と診断された患者から、エクアドルで発見されたのと同じ病原菌が見つかる。

1920年1月17日の夜、大学構内で野口英世に対する名誉博士号の授与式が厳かに挙行された。コロメ学長は「科学者としての貴殿を称賛する証としてユカタン州立医薬科大学は貴殿に名誉外科医学博士の称号を授与致します」と述べる。待機していた楽団が、ユカタンの美しい音楽を次ぎつぎと演奏した。

当時29歳の医学生だったオトリオ・ビジャヌエバは大学で野口英世の講義を受けたひとりであった。

彼は「青春の思い出 ノグチ」と題する文の中で次ぎのように記している。

「私は毎日研究室に出かけ、彼がどのように研究するのかをみるのが好きだった。研究室は経験を得ようとする紳士たちでいっぱいであった。ある朝、医学者と学生が集り、ドクトル・ノグチが講演をしてくれることになった。英語の講演をモリナ博士が通訳した。最後に彼は私たちに顕微鏡で黄熱病の病原菌レプトスピラ・イクテロイデスを示してくれた」

野口の実験する姿に感銘を受け、彼は名誉博士号の授与式にも参列した。そして、大学卒業後、彼は医学者として活躍する。

1940年に日本の国際文化振興会が募集した懸賞論文の参加賞として鳳凰の図柄の置物をもらってから、彼は野口英世への尊敬の念と、親日的な思いを一層深めてゆく。

そして、博士はメリダを訪れる日本人の世話をし始め、自宅に招待してメキシコ料理で歓待するようになった。45番街にある彼の家の扉の上には鳳凰の図柄の紋章が掲げられ、



オーラン附属病院前の野口像

さらに、手紙の便箋や帽子の飾りにまで鳳凰の図柄を用いるようになる。

「記念像を建立してドクトル・ノグチの遺徳を顕彰したい・・・」という博士の言葉に耳を傾けたのは、メリダ市を訪れた玉川学園大学の当時の学長、小原国芳である。

そして、1961年5月、オーラン病院の前に1メートルほどの野口像が建立された。それから4年後、日本政府はオトリオ・ビジャヌエバ博士に対して勲三等瑞宝章を授与した。

叙勲の機会に訪日した博士は猪苗代の野口の生家、会津若松の会陽医院跡へも訪れている。父親に付き添った長女のマリナも親日家となり、ビジャヌエバ家はユカタン半島で野口英世を信奉する一家となった。

その後メリダ市に「生物医学研究センター」が開所されると、その式典で博士は次ぎのよ



ビジャヌエバ3姉妹（右からマリナ、ルス、マティルデ）

うにコメントした。

「ドクトル・ノグチはまるで神の再来のようだった。ドクトルのお蔭で助かった人の数は、はかりしれない」と。

ビジャヌエバ博士の娘の4姉妹は、マリナ、マティルデ、カルメン、ルスという。

長女のマリナは父親の影響で、野口英世を人生の師と仰いでいた。彼女は、ユカタン州立大学の医学部を卒業後、医者として病院に勤務した。退職後は、社会福祉活動と共に、日本人の世話もしていた。

2003年12月、私は45番街のお宅を20年ぶりに訪問した。4姉妹は、マリナが81歳、カルメンが77歳で、ふたりだけになっていた。マリナは病気のために失明していたが、朗らかに私を歓待してくれた。

かつて彼女は、「生ある限り、社会に対するお手伝いをつづけていきたいと思います。それがドクトル・ノグチに一歩でも近づく道だと考えます」と熱っぽく語った。

ユカタン半島の思い出に、野口英世の名前とビジャヌエバ一家の暖かいもてなしを心に刻み込んでいる日本人は私だけではないだろう。

（次号へつづく）

野口英世と中南米 (4)

ペルーの風土病、オロヤ熱研究への評価

山 本 厚 子

野口英世が黄熱病の研究のためにパナマ、エクアドル、メキシコに続いて訪れたのは南米ペルーである。

1920年、ペルー北部で黄熱病が流行したので、ペルー政府はロックフェラー医学研究所に救援を要請した。

フレキシナー所長の命を受けた野口英世は、ニューヨークから3週間の船旅の後にペルー北端の港町、パイタに上陸する。

しかし、研究地は鉄道で3時間内陸に入ったピウラ市やモロボン村などであった。当時は電気設備も悪く飲料水も不足するような劣悪な環境であった。そのうえ、野口が到着した時には黄熱病患者は見あたらず、さらに内陸部の砂漠地帯の村々へ馬で出かけなければならなかった。

そんな小旅行の途中で落馬して怪我をしたことを、野口は次ぎのように書簡に書いている。

「落馬して頭と肩と腿をつよく打ちました。しかし骨折はありません。しばらく休息してから私は旅をつづけ、焼くが如き太陽に照らされて1時間半の騎馬旅行を終わりました・・・」と。

ピウラに1ヶ月間滞在する間に、助手の協

力を得て、黄熱病患者の血液の中から病原体の「レプトスピラ・イクテロイデス」を見つけた野口は、「研究は大成功です」と、ニューヨークの所長に報告する。

ペルーで野口の研究を支えた助手はイスラエル・ジャコブ・クリーグラーという。彼はポーランドからの貧しいユダヤ系移民の息子で、苦学の末に医学者となった。また、ニューヨークで黄熱病研究を支えたのがエベリン・ティルデンで、ふたりとも1916年から研究所で野口と一緒に働いていた。

首都リマを訪れた野口英世に時の大統領、アウグスト・B・レギアは「リマに設立予定の国立衛生研究所の所長に就任していただけますか」と要請する。

「年俸2万ドルで5年契約」という破格の条件であった。しかし、上司のフレキシナー博士は野口がロックフェラー医学研究所に残るように説得したので、野口はこの件を承諾しなかった。

1984年の秋、私は野口英世の足跡を辿ってリマに滞在していた。国立図書館のある旧市街のアバンカイ通りには食料品・雑貨などの出店が道路狭しと並び、行き交う人々が車道

— 15 —

にまで溢れていた。治安が悪く「危険地区」として、在住する日本人は足を踏み入れないほどだった。

当時の図書館関係者は官僚的で、入館に複雑な手続きが要求された。やっと石造りの建物の地階の新聞閲覧室に入館が許されたが、コピー・サービスがなかった。

リマ市の新聞、ラ・プレンサ紙（1920年5月31日、月曜日）に5段抜きの野口英世のインタビュー記事が写真と共に掲載されていた。

—ドクトル・ノグチですね。

「セルビドール・デ・ウステデス（はじめまして）

—ピウラでのお仕事はどのようなものでしたか？

「猛威を振るっていた黄熱病の病原菌を見つけ、1人の患者にワクチンを注射しましたが、手遅れで亡くなりました。本当ならもう少し命を長らえたでしょうに。クリーグラー博士はひと足先にピウラに出かけ、3人の患者にワクチンを使用した結果、その人たちは数日後に回復しました・・・」

インタビューは続く。同紙の記者は、野口のことを「小柄ではあるが、日焼けした顔、たくしあげた黒い髪、目つきは鋭いが、知的で非常に魅力的な紳士である」と、第一印象を述べている。野口は地球の裏側のペルーで、望郷の念を抑えられずに故郷の猪苗代や磐梯山のことを記者に語った。

それから20年後の2004年の秋、『野口英世は眠らない』（集英社刊）が出版される折り、パブリシティ用として私はこの新聞のマイクロフィルムを入手した。それは、伊藤忠商



野口と握手をしたことのあるファン・フランシスコ・バレガ博士



野口信奉者で野口の論文のコレクターのアリスティデス・エレル博士

事のリマ支店長、森輝男氏のご協力により実現したのだった。

ペルーの図書館での記事との出会いを懐かしんでいるうちに、私の脳裏には野口の信奉者、ファン・フランシスコ・バレガ博士やアリストティデス・エレル博士の笑顔が浮んできた。バレガ博士はニューヨークで野口と握手をしたことがあり、野口と共同研究していたバティスティーニ博士の友人であった。

テレマコ・バティスティーニ(1895～1960)は、スペインのマドリッド大学医学部を卒業後、ロックフェラー財団の奨学生として、ジョンズ・ホプキンス大学で公衆衛生学を学んだ。ニューヨーク州立研究所やワシントン国立衛生研究所で研修を重ねた後、1924年～26年の期間ロックフェラー医学研究所で働く。

ペルー政府は1925年、まだ科学的に解明されていなかったオロヤ熱の研究を野口に依頼し、患者の血液を冷凍してニューヨークに送った。そして1926年、「オロヤ熱の病原体、バルトネジャ・バシリフォルシスの培養」という論文が野口英世とテレマコ・バティスティーニの共著で、ペルーの官報に掲載された。

この病気はペルー、エクアドル、コロンビアなどの山岳地帯の風土病で、スナバエを媒体とする病原体が赤血球に寄生して起こる病気だった。強度の貧血と発熱、そして全身にイボが出来る病気で1870年、アンデスの鉾山町、オロヤで流行をみた。

ベルガ（イボ）または、カリオン病とも呼ばれる。カリオンというのは、ダニエル・アルシーデス・カリオン（1857～1885年）という医者の名前に由来し、彼は病気の感染経路を実証しようと病原体を自らの身体に注射し

て、若くして一生を終えた。



インカ時代の土偶（ベルガ病で身体中にイボが出来て苦しむ男）（天野博物館所蔵）

この病気はコロンブスが新大陸に到着する以前から流行しており、別個の病気と思われていた。インカ時代の土偶には、この病気で苦しむ人の姿が見られる。

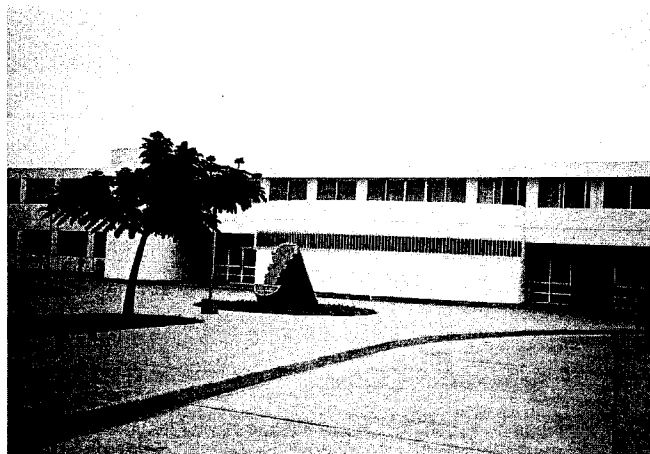
野口とバティスティーニの共同研究の結果、オロヤ熱、ベルガ、カリオン病は同一の病原体から起因する疾病であると科学的に実証された。そのため、ペルーの医学者たちは野口英世に対して黄熱病研究以上に、オロヤ熱の研究を高く評価している。

また精神医学面から、野口の業績を評価するのはハビエル・マリアテギ博士である。彼の父親は、「インディヘニスモ(先住民主義)」の提唱者として有名なホセ・カルロス・マリアテギである。

彼は厚生省に属する「国立精神衛生研究所
オノリオ・デルガード ヒデオ・ノグチ」の



研究所の初代所長、ハビエル・マリアテギ博士と筆者



国立精神衛生研究所の正面全景



野口英世の名前を冠している

初代所長であった。「ヒデヨ・ノグチ」の名前を冠するこの研究所は、46000㎡の広大な敷地に総額22億円の工費で、日本政府が無償資金援助計画の一環として1982年に建設した。

リマ市の旧市街を流れるリマック川の東岸の低所得者の居住地区に存在する近代的な研

究所の2階の廊下で、新千円札と同じ顔の野口英世が訪れる人びとを静かに見つめている。

(次号につづく)

2005年チリ大統領選挙

藤 内 綾

昨年12月11日および本年1月15日、チリにて大統領選挙第1回投票および決選投票がそれぞれ行われ、与党連合のミチェル・バチェレ候補（社会党）が次期大統領に選出された。ラゴス現政権への高い支持率を背景に、当初は、各紙世論調査において「バチェレ氏有利」と言われていたが、野党同盟のピニェラ候補（国民革新党）の追い上げにより、第1回投票で結論が出ず、翌年行われた決選投票において、バチェレ候補が僅差でピニェラ候補を押さえ勝利するという結果となった。

我が国とチリとは伝統的に友好関係を維持しているが、近年の資源関係を基軸とした経済関係の緊密化を背景に、日チリ間の交流は更なる高まりを見せている。昨年11月に行われた日智首脳会談では、小泉総理とラゴス大統領との間で、日本・チリ経済連携協定（EPA）交渉の立ち上げが合意され、本年から締結交渉が開始される予定である。我が国にとって、日本・チリEPA締結交渉並びにEPAが締結された場合の協定執行という面からも、4年間の任期を有するバチェレ新政権との友好関係維持は必要不可欠なものとなっている。

本稿では、決選投票の結果概要、バチェレ氏勝利の背景、および我が国との関係の見通しにつき取り上げることとしたい。

1. 大統領選決選投票の結果

昨年12月11日の第1回投票において、いずれの候補者も当選に必要な有効投票の過半数を獲得することができず、本年1月15日、与党連合のミチェル・バチェレ候補（社会党）と野党同盟のセバスティアン・ピニェラ候補（国民革新党）の上位2候補による決選投票が行われた。右において、バチェレ候補が次期大統領に選出された。（注：第1回投票の概要については「ラテン・アメリカ時報」平成18年1月号を参照）。

ミチェル・バチェレ候補（与党連合：社会党） 53.49%¹

セバスティアン・ピニェラ候補（野党同盟：国民革新党） 46.50%

¹ 開票率99.71%時点。

2. バチェレ候補の公約

バチェレ候補は、昨年10月に発表した政権綱領（Plan de Gobierno）の他、決選投票前の12月27日、新政権の最初の100日間で行う36の施策を取りまとめた「100日・36公約プラン（Plan 100 Días, 36 Compromisos）」の2つを発表している。

政権綱領の内容は、現ラゴス政権の施策を基本的に踏襲するものであるが、閣僚の男女比率の同率化といった女性大統領ならではの施策も見せている。また、「100日・36公約プラン」では、雇用、教育、医療といった社会保障分野に焦点が当てられており、同氏の経歴（医者であり、ラゴス政権下では厚生大臣を務めた）にも鑑みれば、社会分野への傾倒が強まるのではないかと見られる。また、昨年9月の憲法改正により、大統領任期が現在の6年から4年に短縮されたことにより、バチェレ氏は短期間で具体的な成果をあげるため、政権開始後にもこれら社会分野に積極的に着手する可能性が考えられる。

3. バチェレ氏勝利の背景

バチェレ、ピニェラ両候補ともに公約に大きな違いはなく、選挙戦終盤には、公約の是非よりもむしろ候補者個人の資質を問う選挙戦が展開された。このような中で、バチェレ候補勝利の背景には、以下の点があると考えられる。

（1）現ラゴス政権への高い支持率

チリの主要輸出品である銅の国際価格の上昇、世界経済の着実な回復、国内消費の堅調な推移を背景に、ラゴス政権は高い経済成長率を維持しており、2004年の実質GDP成長率は6%程度を記録した。右を背景として、各種世論調査によれば、ラゴス現政権への支持率は約60%と極めて高く、ラゴス政権の後継者とも言えるバチェレ氏にとっては、こうした現政権の高支持率が選挙戦において追い風となったことは間違いない。

（2）野党同盟の結束の乱れ

第1回投票の際にピニェラ、ラビン両候補が立候補した野党同盟は、右投票終了後、ただちにラビン候補のピニェラ候補への支持を固めるなど、亀裂を深めていた感のあった野党同盟の結束に努めた。しかし、最終的に野党同盟が一丸となって選挙戦終盤に臨むことができなかったと見られる。決選投票のピニェラ候補の獲得投票率（46.50%²）は、第1回投票のピニェラ及びラビン両候補の獲得投票率（それぞれ25.41%及び23.23%）の合計（48.64%）より2%近く低く、ラビン候補の支持票を全て取り込むことができなかったと思われる。

（3）活発なラゴス現政権の選挙支援

² 開票率99.71%時点。

第1回投票終了後、バチェレ候補は、与党同盟内で中道寄りに位置するキリスト教社会民主党の票を確実に取り込むべく、与党連合内の統一候補選で敗退したアルベアル前外相の取り込みを模索したが実現せず、与党連合の足並みの乱れが目立つこととなった。しかしながら、ラゴス現政権下の閣僚が辞任してバチェレ陣営の選挙参謀に就任するなど、第1回投票後から、ラゴス現政権は積極的にバチェレ氏の支援を行った。

(4) バチェレ氏自身の人柄

バチェレ氏は、同氏の「庶民的で親しみやすい女性候補者」というイメージを全面に、国民から広く支持を集めた。選挙戦の始めには、マチスモ（男尊女卑）の意識が根強いチリ社会において、女性大統領が果たして受け入れられるか、シングルマザーという経歴を有するバチェレ氏は保守層に受け入れられるかといった意見も聞かれたが、結果として、バチェレ氏の親しみやすさは、同氏のイメージアップ向上において効果的に作用したと言える。

3. 我が国との関係

バチェレ候補は、昨年10月に発表した自らの政策綱領の中で、国際通商がチリの発展にとって重要であり、マルチ及びバイの貿易の枠組みが公正かつ開かれたものとなるよう努力する事、さらにアジア太平洋地域との経済関係強化の重要性については、中国、インド、及び我が国との自由貿易協定締結を達成する旨主張している。

ラゴス現政権の後継者として、現在益々緊密化する二国間関係を更に促進し、国際社会における良きパートナーとして、友好・協力関係が維持・拡大することが期待される。

(とうない・あや 外務省中南米局南米カリブ課)

